子どもの情動と親の養育態度に関する基礎研究

大塚健樹・中島　修

1　問　題

近年、保育所、幼稚園、小学校など保育、教育の現場で、子どもの行動がわかりにくくなった、見えにくくなったとの指摘がなされるようになってきた。また、「ちょっと気になる子」に代表されるように、保育者や教師、友達とうまく関係性をもてない子も増えてきている。さらに、新生児期、乳児期にある子どもでも「サイレント・ベイビー」や「気質的に扱いにくい子」などと言われ、養育者との望ましい関係性を結びにくい子の存在が確かめられている。

これら他者との関係をうまく結べない、あるいは他者とうまくやり取りが展開できな子どもの中には、高機能自閉症、アスペルガー障害、学習障害、発達性協調運動障害、注意欠陥／多動障害などの発達障害を抱えている子も含まれるが、神経学的、医学的に問題のないいわゆる身体的には健常である子どもの中にも認められる。健常である子どもの場合には、何らかの理由によりある時点から養育者と望ましいやり取り、つまり相互交渉が展開できなかったことが原因と推測される。

では、他者との良好な関係や望ましい相互交渉とはどのような状態であろうか。誕生直後の新生児は、自身の危機的な生理的状態（興奮や緊張の感覚）を泣くという行動で表出する。この泣く行動に対して、養育者は危機的な状態の原因を探り、それを改善するための養育行動を展開する。展開した養育行動が適切であれば、新生児は生理機能を整え落ち着いた状態になり、健全な発育を遂げる。逆に不適切であれば、さらに興奮した状態が続き、さらにその状態が日常的に継続すると、生理機能に不具合が生じ、極端な場合、精神分析家のボウルヴィ（1976、1977、1981）などが指摘するように発育不全から死に至るというケースも考えられる。

したがって、新生児期は、「新生児の泣き・ぐずりに対して養育者の養育行動によってなだめる」という行動系列の繰り返しが、新生児の健全な発育や発達を促進することになる。この行動系列がうまく展開されるためには、新生児が自身の生理機能の不具合を泣くという行動で表出することが前提にあり、それにたいして養育者がどのような関わり方をしたかが問題となる。つまり、望ましい相互交渉が展開できたかどうかは、養育者の責任ということになる。しかしながら、前述の「サイレント・ベービー」や「気質的に扱いにくい子」の場合、前記の子はあまり泣いたりしないので養育行動を行うタイミングがつかめず、後記の子は養育行動を展開してもその行動が適切であるかどうか判断が難しかったりして、主として子ども側の要因によって望ましい相互交渉が展開できない場合もある。いずれの場合に原因があるにせよ、この新生児期から始まる相互交渉を土台にしながら、子どもは他者とのやり取りや関係性を築いていくことになる。

この新生児期から望ましい相互交渉が展開されていると、興奮（生理機能が不安定な状態）で泣くという情緒が形成され、養育行動によって生理機能が安定すると快でリラックス（笑う）するという情緒に分化が始まる。さらに、興奮状態が続くと怒りといった情緒に変化し、また、快の状態を保とうとすれば養育者を求める情緒を発生させ、それがかなわないと不安や恐れといった情緒に変化し、あわせて、それらの情緒を表す行動や表情を成長と共に獲得していく。そして、さらなる成長と発達と共に、より複雑な情緒とそれを表す手段としての情動を獲得していく。したがって、情緒とはその人自身の生理的な機能の変化を調整することによって生じる感覚であり、その情緒の有り様を表現するのが情動である。したがって、情動とは、生体がなすホメオスタシス的な調節機構の一部として生じる。それは、情動状態と呼ばれる脳、体性感覚器官、神経系、内分泌系での生理的変化であり、情動行動と呼ばれるその変化によって組織され

る行動で、表情や声のトーン、身体動作や言語として表出される行動傾向である。また、情動は、内臓感覚を経て心の体験として（情動体験、また感情とも呼ぶ）として記憶される過程も含む。

情緒には、喜び、怒り、恐れ、悲しみ、好奇、驚き、嫌悪などがあり、これらの情緒が表情や行動で表出されるたものが情動となる。したがって、子どもたちの示す情動は、子どもの状態を現す「窓」のようなもので、彼らの危機、孤立、葛藤などを映し出す。このことは、情動が自己の状態や、関係の質を示すシグナルとして「他者に働きかけたり、働きかけてもらったりする機能」としての重要な役割を果たしていることを意味し、自己への関わりを発生させる機能と他者の関わり方を調整する機能として働くことになる。例えば、幼児や少年少女が、自己の状態を示すのは、さまざまな情動によってである。情動は、周囲とうまくいかないときのシグナルであり、うまくいったときのシグナルでもある。それは、個体の反応であるとともに、個体を越えて、保育者や養育者などのかかわりを変化させるために働くことがある。

冒頭で述べた健常児でも他者とうまく関われない、やり取りがうまくいかないという問題は、この情動がうまく機能していないということに原因があると捉えることができる。

また、同じく冒頭に挙げた発達障害を抱える子どもたちの治療や療法の中には、情動を調整する能力を身につけさせる内容が含まれている。以上のように情動は、他者との相互交渉によって調整され、獲得されるものである。

現在の子育ては、かつてのように性別役割分業システムによる母親が中心となって行う方略から、父親が中心に行う、共働きにより保育士が中心に行う、あるいは虐待などから育児そのものが崩壊しているなど様々なパターンが存在し、それぞれのパターンに注目しないと、相互交渉の質が把握できない状況にある。また、母親が中心に行っていてもむしろそのことで母親のストレスが増加し、相互交渉が崩壊しているケースも指摘されている。いわゆる愛着障害（今現在正式に定義された概念ではない。なお、「乳・幼児医学心理学会」が現在定義を行っている最中である。）と呼ばれるケースである。

本研究の目的は、現在の子育ての状況の中で、子どもの情動がどのように表出され、それがどのような養育行動によって獲得されたものかを探ることにある。情動という視点から、子育ての質を探ることにより、親子間の望ましい相互交渉のあり方を示すことができると同時に、情動が獲得されない子どもの早期発見と、早期介入による相互交渉の改善が図れると考える。

2　方　　法

子ども達がどのような情動を表出しているかを探るための観察調査を、M附属K幼稚園、同M幼稚園ならびにO保育園にて行った。調査は、1歳から6歳までの子ども達の表情をビデオに撮影するというものである。撮影されたのは142名の子ども達である。

その後、後述するビデオで分析されて情動についてと、普段の子どもの様子や養育行動、生理的状態の特徴などに関する質問紙を作成し、O保育園の園児の親に調査を行った。観察調査は調査は平成17年7月と17年12月に、質問紙調査は18年2月に行った。質問紙調査の最終回収日は、平成18年3月3日であった。

(1)　観察調査

先に述べたように142名の子ども達の自由遊びの時の表情や行動153場面をビデオに撮影し、一人ひとり表情を分析し、どのような情動に分類されるかの判定を行った。その結果、以下の8つに分類れた。

①笑ったときの情動（31場面）
②怒ったときの情動（25場面）
③怖がったときの情動（24場面）
④悲しんでいるときの情動（20場面）
⑤好奇心から何かをじっと見ているときの情動（19場面）
⑥驚いてびっくりしたときの情動（15場面）
⑦嫌なことがあったときの情動（14場面）
⑧分類不能（5場面）

分類できた7つの情動が、第三者からみて比較的幼児期の子どもの情動として分かりやすいと思われる。

(2)　質問紙調査

前述したように子ども達の表情や行動を分析し、理解しやすい情動を抽出し、その情動と親の養育行動との関係を調査することにした。調

査は、O保育園の園児の父母51名であった。

質問紙の内容は、回答者のプロフィールと情動の表出程度、子どもの生理的な状態を含めた行動特徴、養育者の養育態度の特徴、さらに乳児期の養育行動の特徴である。これらの内容について項目を設定し、それぞれ4件法ないし3件法で評定してもらった。なお、質問紙では、情動という言葉は一般的にはわかりにくいと判断し、表情という言葉に置き換えた。

3　結果と考察

(1)　プロフィール

調査対象の回答者の構成、世帯構成、子どもの年齢構成、兄弟関係は、それぞれ次の**表1**、**表2**、**表3**、**表4**に示すとおりであった。回答者は母親が多く、核家族世帯が比較的多い構成であった。

(2)　子どもの情動

表出される表情の豊かさの表出程度に関する養育者の評定結果は、**表5**に示すとおりであった。笑った表情と悲しい表情について豊かであるという印象が強い傾向が示された。他の表情も1点台であり、今回示した表出された表情は比較的豊かな印象、つまり情動を判断しやすい項目であったと思われる。

(3) 子どもの行動特徴と生理機能の状態

子どもの行動特徴と生理機能の状態については、**表6**に示すとおりであった。今回調査対象となった子ども達は、比較的「体を動かして遊ぶことがすき」で、「人のやることをよく見て」おり、「親とお話をすることがすき」な特徴を持っているようである。

(4)　親の養育態度

養育者の養育態度については、**表7**に示すとおりであった。養育態度の特徴としては、「お子さんに話をする時は、顔を見て話すようにしている」というのが際だっているように思われる。

(5)　乳児期の親の養育行動

乳児期の養育行動については、**表8**に示すとおりであった。先の養育態度と連動するように、乳児期は「語りかけるときは、目をよく見ていた」というのが特徴として際だっている。

(6)　相関関係から

上記(1)から(5)のそれぞれの項目間について相関関係を求めた。統計的に棄権率10パーセント未満の有意な相関関係が認められた項目間の関係は次の通りとなった。

1) 家族が多いと人の顔を見て話をする傾向がある。
2) 家族が多いと子どもの感情が何となく分かる傾向がある。
3)「笑ったときの表情」が豊かだと「怒ったとき」「怖がったとき」「悲しいとき」「驚いたとき」「いやなことがあったとき」それぞれの表情も豊かな傾向がある。
4)「笑ったときの表情」が豊かな子は「人のやることをよく見ている」傾向がある。
5)「笑ったときの表情」が豊かだと「親とお話をすることが」好きな傾向がある。
6)「笑ったときの表情」が豊かであると「子どもを育てることによって自分も成長していると感じている」傾向が親に認められる。
7)「怒ったときの表情」が豊かな子は「笑った時の表情」「怖がった時の表情」「好奇心でじっと見ている時の表情」「驚きの表情」「いやなことがあったときの表情」が豊かな傾向がある。

表1　回答者　（人）

回答者	父	母	祖　母	祖　父	計
	1	46	2	2	51

表2　世帯構成　（世帯数）

世帯構成	核 家 族	拡大家族	計
	31	20	51

表3　子どもの年齢　（人）

年齢	1歳	2歳	3歳	4歳	5歳	6歳	計
	6	8	13	11	7	6	51

表4　兄弟関係　（人）

きょうだいの構成	一人っ子	二人きょうだいの長子	二人きょうだいの二番目	三人きょうだいの長子	三人きょうだいの二番目	三人きょうだいの三番目	四人きょうだいの四番目
	19	10	12	3	3	3	1

表５　表出される表情の豊かさ

非常に豊かな方だと思う　→１点　あまり豊かな方ではないと思う →３点
豊かな方だと思う　→２点　その表情は分かりにくい　→４点

項　　目	平均	SD	項　　目	平均	SD
a）笑った時の表情	1.196	0.401	e）好奇心から何かをじっと見てる時の表情	1.471	0.612
b）怒った時の表情	1.431	0.671	f）驚いてビックリした時の表情	1.451	0.642
c）怖がった時の表情	1.451	0.642	g）嫌なことがあった時の表情	1.471	0.578
d）悲しんで泣く時の表情	1.196	0.401			

表６　子どもの行動特性と生理機能

非常にそうである　→１点　あまりそうではない　→３点
どちらかというとそうである→２点　まったくそうではない　→４点

項　　目	平均	SD	項　　目	平均	SD
a）絵本やお話に興味がある。	1.451	0.610	f）人と話をする時、相手の顔を見て話す。	1.490	0.612
b）体を動かして遊ぶことが好きである。	1.157	0.367	g）親の言うことを聞く方である。	2.020	0.761
c）人のやることをよく見ている。	1.274	0.493	h）よく風邪をひく。	2.569	0.855
d）テレビやビデオなどを見ることが好きである。	1.360	0.525	i）お腹が痛いと言うことが多い。	3.260	0.633
e）親とお話をすることが好きである。	1.294	0.502			

表７　親の養育態度

非常にそうである　→１点　あまりそうではない　→３点
どちらかというとそうである→２点　まったくそうではない　→４点

項　　目	平均	SD	項　　目	平均	SD
a）お子さんと話をする時は、顔を見て話すようにしている。	1.353	0.560	f）お子さんの表情を見ると大体のことは分かる。	1.560	0.577
b）お子さんに何か指示する時、言葉だけで行うことが多い。	2.255	0.717	g）お子さんに良く絵本を読んであげる。	2.314	0.761
c）お子さんに何かやり方を教える時、実際にやってみせることが多い。	1.549	0.673	h）お子さんと外でよく遊ぶ方である。	2.529	0.674
d）お子さんに対してできるだけ誉めるようにしている。	1.628	0.631	i）子どもを育てることによって自分も成長している感じている。	1.588	0.638
e）お子さんに対して語りかけることが多い方である。	1.804	0.749	j）仕事などが忙しくてお子さんとじっくり関われていないと感じることがある。	1.980	0.860

表８　乳児期の特徴

そうであった　→１点　そうではなかった　→３点
どちらかというとそうであった→２点

項　　目	平均	SD	項　　目	平均	SD
a）抱っこする時は、縦抱きが多かった。	1.824	0.818	d）よく笑う子であった。	1.392	0.666
b）「イナイ　イナイ　バア」をよくした。	1.412	0.572	e）子どもの感情が何となく分かった。	1.373	0.564
c）語りかける時は、目をよく見ていた。	1.078	0.272			

8)「怒ったときの表情」豊かだと「親とお話をすること」が好きな傾向がある。

9)「怖がったときの表情」が豊かな子は「笑った時の表情」「怖がった時の表情」「好奇心でじっと見ている時の表情」「驚きの表情」「いやなことがあったときの表情」が豊かな傾向がある。

10)「怖がったときの表情」が豊かな子は「人のやることをよく見ている」傾向がある。

11)「悲しんで泣くときの表情」が豊かな子は「笑った時の表情」「いやなことがあったときの表情」が豊かな傾向がある。

12)「悲しんで泣くときの表情」が豊かな子は「人のやることをよく見ている」傾向がある。

13)「好奇心から何かをじっと見ている時の表情」が豊かな子は「怒ったときの表情」「怖がった時の表情」「驚きの表情」「いやなことがあったときの表情」が豊かな傾向がある。

14)「好奇心から何かをじっと見ている時の表情」が豊かな子は「絵本やお話」に興味がある傾向がある。

15)「好奇心から何かをじっと見ている時の表情」が豊かな子は「親とお話をすることがすき」で「人と話をするとき、相手の顔を見て話す」傾向がある。

16)「驚いてびっくりしたときの表情」が豊かな子は「笑ったときの表情」「怒ったとき」「怖がったとき」「好奇心から何かをじっと見ている時の表情」「いやなことがあったとき」それぞれの表情も豊かな傾向がある。

17)「驚いてびっくりしたときの表情」が豊かな子は「体

を動かして遊ぶのが好き」という傾向がある。

18)「驚いてびっくりしたときの表情」が豊かな子は「人のやることをよく見ている」「親とお話をすることがすき」という傾向がある。

19)「いやなことがあったときの表情」が豊かな子は「笑ったときの表情」「怒ったとき」「怖がったとき」「悲しんで泣くときの表情」「好奇心から何かをじっと見ている時の表情」それぞれの表情も豊かな傾向がある。

20)「いやなことがあったときの表情」が豊かな子は「人のやることをよく見ている」「親とお話をすることがすき」という傾向がある。

21)「いやなことがあったときの表情」が豊かな子は「親に外で遊んでもらっていない」傾向がある。

22)「絵本やお話に興味がある子」は「親とお話をすることがすき」で「人と話をするとき、相手の顔を見て話す」傾向がある。

23)「絵本やお話に興味がある子」は「保護者から絵本をよく読んでもらっている」傾向がある。

24)「人のやることをよく見ている」傾向のある子は「親とお話をすることがすき」で「人と話をするとき、相手の顔を見て話す」傾向がある。

25)「人のやることをよく見ている」傾向のある子は「乳児期縦抱き」をよくされた傾向がある。

26)「ＴＶやビデオをよく見ている子」は風邪をひきやすい傾向がある。

27)「ＴＶやビデオをよく見ている子」の親は「忙しくて子どもとじっくり関われない」と感じている傾向がある。

28)「親とお話をすることが好きな子」の親は、「子どもを誉める」傾向がある。

29)「人と話をするとき、相手の顔を見て話す」傾向のある子は、「親が子どもの顔を見て話す」傾向がある。

30)「人と話をするとき、相手の顔を見て話す」傾向のある子の親は、「乳児期子どもの感情がなんとなく分かる」と感じていた。

31)「親の言うことをよく聞く」傾向のある子は、「子どもと話すときには顔を見て話すようにしている」傾向が強い親に育てられている。

32)「親の言うことをよく聞く」傾向のある子は、「仕事などが忙しくて子どもとじっくりかかわれていないと感じる」傾向の弱い親に育てられている。

33)「親の言うことをよく聞く」傾向のある子は、「乳児期子どもの感情が何となく分かった」親に育てられている。

34)「おなかが痛いとよく言う」傾向のある子は、「乳児期語りかけるときは、目をよく見ていた」傾向の弱い親に育てられた。

35)「おなかが痛いとよく言う」傾向のある子は、「乳児期よく笑う」傾向のある子であった。

36)「話をするとき子どもの顔を見て話をする」傾向のある親に育てられた子は、乳児期も目を見て語りかけられていた。

37)「話をするとき子どもの顔を見て話をする」傾向のある親に育てられた子は、乳児期よく笑う傾向が見られた。

38)「言葉だけで指示する」傾向の親は、「子どもを育てることによって自分も成長している」と感じていない傾向がある。

39)「子どもに何かを教えるときに実際にやってみせる」傾向がある親は、「子どもをできるだけ誉める」傾向がある。

40)「子どもに何かを教えるときに実際にやってみせる」傾向がある親は、「子どもの表情を見るとだいたい分かる」傾向がある。

41)「子どもをできるだけ誉める」傾向がある親の子は、「親と話をすることが好き」な傾向がある。

42)「子どもをできるだけ誉める」傾向がある親は、「子どもに語りかけることが多い」傾向がある。

43)「子どもをできるだけ誉める」傾向がある親は、「子どもの表情を見るとだいたい分かる」傾向がある。

44)「子どもをできるだけ誉める」傾向がある親は、「乳児期語りかけるときは、目をよく見ていた」という傾向がある。

45)「子どもに語りかけることが多い」傾向の親の子は、ＴＶやビデオを見ることをあまり好まない傾向がある。

46)「子どもに語りかけることが多い」傾向の親は、「子どもの顔をよく見て話す」傾向がある。

47)「子どもに語りかけることが多い」傾向の親は、「子どもをできるだけ誉める」傾向がある。

48)「子どもに語りかけることが多い」傾向の親は、「子どもによく絵本を読んであげる」傾向がある。

49)「子どもに語りかけることが多い」傾向の親は、「子どもとよく外で遊ぶ」傾向がある。

50)「子どもに語りかけることが多い」傾向の親は、「子どもを育てることによって自分も成長している」と感じる傾向がある。

51)「子どもに語りかけることが多い」傾向の親は、「仕事が忙しくて子どもとじっくり関われない」とあまり感じていない。

52)「子どもの表情を見るとだいたい分かる」傾向の親は、「子どもに教えるとき実際にやってみせる」傾向がある。

53)「子どもの表情を見るとだいたい分かる」傾向の親は、「子どもをできるだけ誉める」傾向がある。

54)「絵本をよく読んであげる」傾向の親の子は、「絵

本やお話に興味がある」傾向の子どもである。

55)「絵本をよく読んであげる」傾向の親は、「子どもに語りかけることが多い」傾向の親である。

56)「絵本をよく読んであげる」傾向の親は、「子どもを育てることによって自分も成長している」と感じる傾向がある。

57)「子どもと外でよく遊ぶ」傾向の親の子は、「いやなことがあったときの表情」をあまり見せない傾向がある。

58)「子どもと外でよく遊ぶ」傾向の親は、「子どもを育てることによって自分も成長している」と感じる傾向がある。

59)「子どもと外でよく遊ぶ」傾向の親は、「仕事が忙しくて子どもとじっくり関われない」とあまり感じていない。

60)「子どもを育てることによって自分も成長していると感じる」傾向の親の子は、「笑ったときの表情」が豊かな子である。

61)「子どもを育てることによって自分も成長していると感じる」傾向の親は、「言葉だけで指示する」傾向があまりない親である。

62)「子どもを育てることによって自分も成長していると感じる」傾向の親は、「子どもに語りかけることが多い」傾向がある。

63)「子どもを育てることによって自分も成長していると感じる」傾向の親は、「子どもに絵本をよく読んであげる」傾向がある。

64)「子どもを育てることによって自分も成長していると感じる」傾向の親は、「お子さんと外で遊ぶことが多い」傾向がある。

65)「子どもを育てることによって自分も成長していると感じる」傾向の親は、「仕事が忙しくて子どもとじっくり関われない」とあまり感じていない。

66)「乳児期に縦抱きの多かった」傾向のある子は、「人のやることをよく見る」傾向がある。

67)「乳児期語りかけるときは、目をよく見た」傾向の強い親に育てられた子は、「お腹が痛いということ」が少ない傾向がある。

68)「乳児期語りかけるときは、目をよく見た」傾向の強い親は、「話をするとき子どもの顔を見て話をする」傾向が強い。

69)「乳児期語りかけるときは、目をよく見た」傾向の強い親は、「子どもできるだけ誉める」傾向が強い。

70)「乳児期よく笑う」傾向の強かった子は、「話をするとき子どもの顔を見て話をする」傾向の強い親に育てられている。

71)「乳児期子どもの感情が何となく分かった」という親に育てられた子は、「人と話をするとき、相手の顔を見て話す」傾向がある。

72)「乳児期子どもの感情が何となく分かった」という親に育てられた子は、「親の言うことをよく聞く」傾向がある。

以上のことから、全体的な傾向として、子どもと接するときは、やはり子どもの顔をよく見て関わることが、情動を育てるという観点からも非常に重要であることが示されたと思われる。また、子どもとの関わりが深いと、子どもの成長が実感でき、子どもの情動も豊かに表出されるようになり、人と関わることそのものが好きになっていく傾向が強くなると言える。

さらに、親との関わりが深いと生理機能も安定し、体も丈夫であること。絵本などを良く読んであげると好奇心が強くなり、親と話をすることが好きになることなどが特徴としてあげられた。これらは、養育者との相互交渉の質が、その後の生理的な安定、人との関わりの安定、外界への興味の程度を規定していくということを示唆している結果といえる。

今回の調査から子どもにとって自分を理解してくれる人がそばにいてくれることが、情動形成に重要な意味を持つことが示唆されたと思われる。しかし、今回の調査結果は、限定された地域で、サンプル数も少ないことから一般的な特徴を示すまでには至らない。今後調査地域を広げ、サンプル数を増やして、情動と養育態度との一般的な傾向を把握したいと考える。

参考文献

1) 大塚健樹　「発達心理学－生涯発達の視点から－」山口北州印刷　2004

2) 大日向雅美・佐藤達哉編集　「現代のエスプリ No.342－子育て不安・子育て支援－」　至文堂　1996

3) 石川元編集　「現代のエスプリNo.474－スペトラムと軽度発達障害Ⅰ－」至文堂　2007

4) ボウルビィ,J.,黒太三郎他訳「母子関係の理論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」　岩崎学術出版　1976、1977、1981

付　記

本研究は、「平成16年度及び平成17年度の盛岡大学学術研究助成」の助成を受けて行われたことを付記します。